

独立行政法人 地域医療機能推進機構 相模野病院（相模原市）

富田昌宏

全国の社会保険病院は2014年4月から独立行政法人へ移行し、「社会保険 相模野病院」も「独立行政法人 地域医療機能推進機構 相模野病院」に名称が変わりました。

相模野病院は、1960年に横浜線矢部駅北口目の前の好立地条件に建てられた、当時4階建てのベッド数170床の病院で、同じ相模原市内の大学病院である北里大学病院より10年古い歴史があります。築52年の古い病院でしたが、2012年に7階建てのベッド数212床の新しい病院へ建て替えられました。

現在の内野直樹病院長（北里大学1976年卒・1期生）が産婦人科のこともあり、産婦人科の特に産科が分娩数年間1,000件以上で、社会保険病院内で10年以上分娩数1位だったようで、産科に関しては相模原市内の中核病院に位置付けられています。

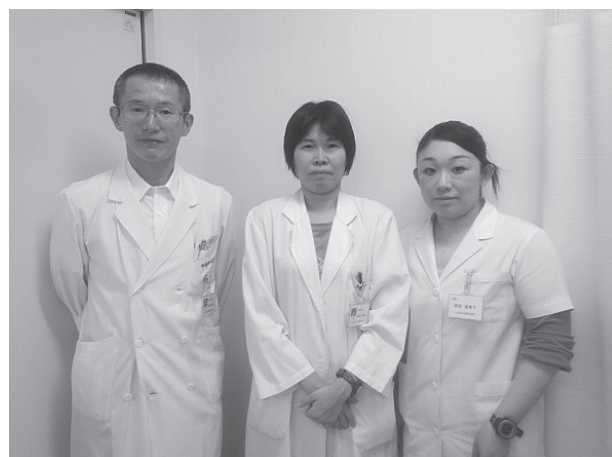
皮膚科は2002年までの10年間ほど横浜市立大学からの出向病院でしたが、2003年に北里大学から嘱託で勤務するようになり、2004年は筆者の富田昌宏（北里大学1994年卒・19期生）が嘱託で1年間勤務し、2005年以降は筆者が常勤で勤務しております。2008年から皮膚科専門医2名体制となり、北里大学病院を主研修施設とした一般研修施設として日本皮膚科学会から認定されました。2010年4月からは西山浩美医師（北里大学1998年卒・23期生）との皮膚科専門医2名の常勤医体制で5年目に突入しており、2014年1月からは週1回の嘱託で前田亜希子医師（北里大学2000年卒・25期生）が勤務するようになり、現在皮膚科専門医3名体制で診療しております。

相模原市は神奈川県で横浜市と川崎市に続き2010年4月に3つの区を持つ政令指定都市（法律では人口50万人以上。相模原市は1987年に50万人超えで2010年当時は70万人以上）となりましたが、

皮膚科常勤医が居て皮膚科で入院可能な病院は、筆者が常勤になった2005年当時人口62万人の相模原市内で北里大学病院と独立行政法人 国立病院機構 相模原病院しかなく、相模野病院が3つ目の皮膚科入院可能な病院となりました（その後、同じく北里大学病院を主研修施設として東芝林間病院が一般研修施設となり、2014年現在は4つです）。皮膚科を標榜するクリニックは増えてきておりますが、皮膚科常勤医が居て皮膚科で入院可能な病院数は、相模原市の人口2014年現在72万人に対してまだまだ少ない状況です。

地域の皆様が皮膚疾患で入院が必要になった時に、患者の受け入れ先の病院の1つとして存続していかねばなりません。紹介状を持たずに直接来院される地域の患者に対しても外来診療を受け入れ、入院治療と手術治療、及び乾癬の生物学的製剤治療など、筆者は相模野病院勤務医として9年間走り続けてきました。

走ると言えば、北里大学病院皮膚科内ではランニングにハマっている医局員が増えたようで、相模原市米軍補給廠内で4月に開催されるハーフマラソン、10km、5km、いずれかのレースと、同じく米



左より：筆者（富田）、西山浩美医師、前田亜希子医師

軍補給廠内で10月に開催される駅伝大会には、北里大学皮膚科の現役医局員とOBを多く見かけるようになりました。

実は筆者もフルマラソンをサブ4（4時間以内で完走）の走力があり、住んでいる調布の市民駅伝大会では個人区間10位以内をキープしており、今年はチームも入賞いたしました。学生時代から20年ほど全く走っておらず、再びランニングに目覚めたのは2010年から一緒に勤務している西山浩美医師の影響が大きいです。彼女は筆者よりフルマラソンが速く、年々自己記録を更新して現時点で3時間31分完走の記録を持ち、国際マラソンに参加資格を得るための3時間15分切りを目標に練習を続け

ており、視覚障害者ランナーの伴走も務める志の高いランナーです。

病院内では皮膚科常勤医2名共にフルマラソンをサブ4で完走することで知られております。これから年を重ねていくにつれてフルマラソンを走り続けることは厳しくなってくるかもしれませんが、地域の患者はこれからも相模野病院に助けを求めて受診されるでしょう。厚生労働省から通達される保険診療点数の改定は皮膚科医にとって厳しいものが多いですが、我々はフルマラソンで得た精神力で、地域の患者と皮膚科クリニックの先生方の力になれるよう、病院勤務医として走り続けていきたいです。

昭和大学藤が丘病院（横浜市青葉区）

中田土起丈

当院は昭和大学の2番目の教育病院として、昭和50年（1975年）に東急田園都市線藤が丘駅から徒歩3分の地に開設されました。近隣の昭和大学藤が丘リハビリテーション病院と合わせた病床数は790床で、計29科を標榜しております。病院のある横浜市青葉区は市内北西部に位置する人口30万人を擁する住宅地域で、患者さんは横浜市内の他、隣接する東京都町田市や川崎市などからも来院されています。

皮膚科では末木博彦先生が昭和大学医学部皮膚科学教室教授に就任後、1年半にわたって診療科責任者が不在の状態が続いておりましたが、昨年10月に私が医長に着任して現在の体制となりました。常勤医数は5名で、兼任講師の池田祐輔先生、飯塚崇志先生、間山真美子先生の他、昭和大学の医局員にも教育や診療に協力して頂いています。外来診療は平日（11月15日を除く）および第1、3、5土曜日の午前中で、午後は生検・手術、入院患者の往診、処置等に充てています。皮膚疾患全般を対象としており、ナローバンドUVB全身照射装置を用いた光線療法、重症乾癬に対する生物学的製剤療法といっ



後列左より：大歳晋平医師、筆者（中田）
前列左より：鈴木悠花医師、松澤有希医師、奥村恵子医師

た治療に加えて、難治性疣贅へのプレオマイシン局注療法や円形脱毛症を対象にしたSquaric acid dibutylester (SADBE) 外用療法など、通常の治療法では効果が乏しい患者さんを対象とした治療も取り入れています。今後はパッチテストやプリックテスト等を用いた、アレルギー性皮膚疾患の原因物質の同定にも力を入れていきたいと考えております。

現在、当院では病診連携の推進を目的に、次のよ

うなフォーラム、懇話会を開催しております。

- ・藤が丘地域連携フォーラム：「顔の見える病診連携」「地域完結型のより良い医療・継続した医療」を目指して、院内で年4回開催しているフォーラムで、地域連携に関するお知らせや報告、学術講演、懇親会から構成されています。
- ・藤が丘病院皮膚科懇話会：青葉区皮膚科医会など近隣の先生方に御協力いただき、皮膚科単独で年1回開催しております。

いずれも、ご都合のつく先生には御参加いただけますと幸いです。

他方、病診連携を進めていく上で、ウイークポイントも正直に申し添えたいと思います。当院では精神科、血液内科、呼吸器外科、小児外科、緩和医療

科の入院治療は行っておりません。したがって、上記5科による治療が必要な疾患を有する患者さんの入院治療は難しいのが実状です。また当科の有する光線装置は全身照射型のみなので、MEDの測定等は昭和大学病院附属東病院（東京都品川区）など他院に依頼しております。

こうした制約はありますが、当院では病診連携をより一層進めていくために、今後、紹介患者さんの受け入れ時間の拡大、紹介状を持たない患者さんの近隣の先生方への誘導等を行っていく予定です。新体制になったばかりで頼りなく見えるとは存じますが、急性期病院に相応しい診療科を目指していく所存ですので、今後とも御指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

横浜市立市民病院（横浜市保土ヶ谷区）

堀内義仁

平成25年4月から、横浜市立市民病院皮膚科で勤務することになりました。今更ながらではありますが、ご挨拶に代えてこれまでの、そしてこれからの病院と皮膚科についてご紹介させていただきます。

当院は昭和35年10月に内科・小児科・外科・産婦人科の4科、42床で開院し、皮膚科の歴史は翌昭和36年7月に整形外科・皮膚泌尿器科・眼科・耳鼻咽喉科・理学診療科・麻酔科が加わり142床となった時から始まります。昭和42年に皮膚科と泌尿器科はそれぞれ独立した科となり、小野茂良先生が皮膚科の初代の部長となり、昭和46年から加藤安彦先生に引き継がれます。加藤先生はその後長年務められ、最終的に病院長にもなられました。平成4年からは毛利忍先生がこれも長年定年まで勤めあげられ、そして昨年から私が引き継ぐこととなりました。長い歴史を数行で書きましたが、これはこの間の部長先生方ならびに皮膚科に勤務された多くの先生方による一筋ならぬご苦労と継続的なご努力によって築かれてきたものであることは紛れもありません。先人たちの労苦に敬意を払うとともに自分の



後列：外来看護師スタッフ
前列左より：井上雄介医師、河野克之医師、筆者（堀内）、磯田祐士医師

今後の使命の大きさに約1年を過ぎようとしている今も身が引きしめる思いで過ごしております。

さて、既にご存知の方も多いと思いますが横浜市立市民病院は2回目の東京オリンピックと同じ年に近隣に移転し、新しい病院に生まれ変わることが決定しております。私の着任後早々に、今度の病院の構想とそれに合わせた新しい皮膚科のビジョンを示すという課題が降りかかり、手探りながらも、「伝

統と刷新のフュージョン！ 皮膚科にもある、先進医療！」をキャッチフレーズとして、既に地域から信頼を受けている皮膚科診療をたゆまずに続けるとともに、診療環境を整え、日々の研鑽を還元、大学病院（横浜市立大学）との太いパイプを維持しつつ、「いつでも市民に寄り添える信頼される医療を提供する」との基本方針を示させていただきました。つまり、これまで培われた伝統を継続しつつ、新しいものを取り入れていこうという基本姿勢です。

現在の当科の特徴は、とにかく手術症例が多い（中央手術：年間約100件、その他の小手術・皮膚生検：年間約400件）ことです。外来では小外傷と熱傷も主として当科が診ています。これは急性期医療の比重を高める今後の当院の方向性とも一致し、高い優先度をもって継続させなければならないものと考えています。アレルギー疾患の診断・治療については、目下のところ大学病院が抜きでているので、特に専門性が高いものについてはお任せしつつ、近隣市民から求められる基本的なものについてはしっかりと診ていこうと思います。自己免疫疾患や膠原病については、大学病院や、院内の専門科と連携して他の同規模病院に引けを取らないようにしていきます。

尋常性乾癬患者の治療については生物学的製剤によるものが、最近のトレンドとなってきていますが、これについても乗り遅れないようにしていきたいと思えます。また皮膚感染症については当院が感染症指定病院であることもあり幅広く診ておりますが、さらに病原体ごとの診断・治療を深めていきたいところです。こう書いていくと、何もかもオールマイティーにやらねばならないようですが、これが地域急性期中核病院のあり方なのかなと自分で納得してしまっています。今後長期的には私を含めスタッフの陣容は変化して、専門性の高い分野も変わっていくとは思いますが、それを含めての「伝統と刷新のフュージョン！」です。今後とも変わらぬご支持とご協力、そしてご指導を宜しくお願い致します。

最後になりましたが、皮膚科スタッフ医師は現在私を含めて4名体制で、多くの外来看護師スタッフ（大きな単位のチーム制で複数科を日替わりローテーションで担当）、病棟看護師、その他多くの医療スタッフに支えられて診療しております。皆様の日頃の仕事に感謝するとともに一部の方を前項写真でご紹介させていただきます（※井上医師は平成26年4月より上原沙織医師に変わっています）。

横浜南共済病院（横浜市金沢区）

廣門未知子

当院は昭和14年に横須賀海軍共済病院追浜分院として創立され、昭和40年に現在の横浜南共済病院と改称されました。横浜市金沢区と横須賀市の境に位置し、京急追浜駅から徒歩10分の場所にある655床の急性期病院です。患者さんは横浜市金沢区、横須賀市追浜周辺、逗子市から多く受診されます。現在新病棟を順次建設中ですが、平成25年には入院病棟の一部が完成し、益々病院が活気づいています。

筆者は、横浜市立大学病院皮膚科の人事で平成25年4月に当病院に赴任しました。10年ほど前に2年間、若手医師の立場で勉強させて頂き、その後横浜市民病院、横浜市立大学病院、横浜船員保険病

院を経て縁あって再び戻ってくる事になりました。

平成25年度まで常勤2名体制で診療を行っておりました。急性期病院には入院重視、チーム医療重視、救急受診患者や連携病院からの入院を極力断らないなどその他諸々の要求があり、病床数及び外来患者数の割に医師が少なくオーバーワークを感じていたため、平成26年度より念願の常勤3名体制に増員となりました。平成25年2月に電子カルテに移行したこともあり、昨年度は皮膚科全般の診察、治療と共に病院システムに慣れることで精一杯な状況でしたが、着任2年目となり、地域拠点急性期病院としての役割を果たすべき体制を整えていきたい



平成25年3月までのメンバー
 後列左より：看護師草刈尚子さん、看護師石曾根希世子さん、クラーク岡眞由美さん、看護師小林修さん
 前列左より：筆者（廣門）、前任者大野真梨恵医師、研修医近藤拓也医師



平成26年4月からのメンバー
 左より：田中理子医師、筆者（廣門）、竹林英理子医師

と思っています。具体的には、平成26年度は入院業務、手術数を増やし、検査が必要な診療を中心に診察を行い、外来はなるべく開業の先生方と重ならない様、紹介制度を活かし病診連携を組みながら診療を行っていきたくと思っています。外来診療は今まで同様の2診のまま継続で行いますが、病棟当番を作り、入院患者の増数に備えていきます。皮膚生検や小手術を行っている外来手術は、3月までは月曜日と水曜日の週2日のみで、手術までの期間患者さんをお待ちせしてしまう時もありました。4月からは水曜日の入院手術を除く毎日(月、火、木、金)に変更し大幅に枠を増やしました(末尾の4月からの日程表をご参照ください)。また、今の皮膚科外来は非常に狭く、看護師さんともぶつからない様に場所を譲り合いながら移動している状況であり、ハード面で苦慮しています。今年度中にスペー

スの広い場所への移動も検討しており、いずれ3診で診療ができれば、患者さんをお待たせする時間も短縮できるのではないかと考えています。

また、現在、特に特徴ある診療を行っていませんが、皮膚科疾患全般は対応ができると考えており、地域拠点病院には必要なことだと思っています。

外来診療を支えてくれるコメディカルは看護師さん2名、クラークさん2名です。病棟は混合病棟で眼科、耳鼻科、歯科口腔外科、外科と一緒です。内科の患者さんも飛び入りで入院している事も多く、入院患者さんの出入りが激しいですが看護師さん達がとても頑張っています。

患者さんが安心して受診、検査、入院のできる病院及び皮膚科を目指していきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

平成26年4月～ 週間日程表

	月	火	水	木	金
外来 午前	廣門 田中	廣門 竹林	廣門 田中	非常勤医師 竹林(第2.4週) 田中(第1.3.5週)	廣門 竹林
	光線療法				
午後	外来手術	外来手術	入院手術	外来手術	外来手術
	皮膚テストなどの検査				
	学童外来				学童外来
病棟当番	竹林	田中	竹林	廣門	田中

国際親善総合病院創立 150周年



山田裕道●社会福祉法人親善福祉協会 国際親善総合病院（横浜市泉区）

国際親善総合病院は昨年2013年に創立150周年を迎え、9月には来賓、医師会・病院関係者をお招きしての式典・祝賀会を、本年1月には森喜朗元総理の「わが人生」と題した記念講演会などいくつかの記念行事を行いました。幕末の創立で現在まで続く病院は佐倉の順天堂（現在の順天堂大学）、長崎の小島療養所（後に精得館、現在の長崎大学病院）と当院くらいでありましょう。この150年の間には紆余曲折があり、病院の所在も名称も変遷してきましたが、その精神は一貫して現在に伝わっています。本稿では当院の歴史を最近解かったことを含めて紹介します。

当院の名称は三度にわたり変更されていますので、それに準じて四期に分けて解説します。

第一期（1863～1866）

The Yokohama (Public) Hospitalの時代

1863（文久3）年に横浜居留地88番地にThe Yokohama (Public) Hospitalが誕生しました。設立母体は横浜居留民委員会（代表はプロイセン領事フォンブラント）で、勤務する医師は元イギリス海軍軍医で前イギリス領事館付医師のジェンキンスでした。開港から4年経過して初めて出来た、居留地の外国人にとっては誰でも診て貰える貴重な公共病院でありました。この病院の建物が、1864年ベアトがフランス山から居留地を撮影した写真に写っていることが解かりました。当時の絵地図と現在の地図を照合すると、居留地88番



写真①

地は本町通りと堀川通りの交差点の北西角、まさに元町の入口であり、現在の地番も中区山下町88番地です。そこでわたしはベアトと同じ角度で現在の風景を撮影しようとカメラをもってフランス山に登りました。しかし今は樹木が生い茂り、対岸の山下町は全く見えません。そこでフランス山の西隣にあるアメリカ山に行き山下町側を撮影しました。堀川の上には高速道路が走って、堀川通りは見えませんが、対岸の建築はいずれも背が高く、位置関係は明瞭でした。ヘボン博士の邸宅あとは総合庁舎であり、その海側隣は人形の家です。山側隣にあったフライ&クックの小造船所あとには高層マンションが建っています。そして本町通りをはさんだその隣、病院があった場所には「パークホームズ横浜山下町88番地」という中層マンションが建っていました（写真①参照）。

第二期（1867～1944）

The Yokohama General Hospitalの時代

横浜に初めてできた公共病院The Yokohama (Public) Hospitalは経営難のためわずか3年で閉鎖に追い込まれます。横浜居留民委員会（代表はイギリス領事マイバーク）は居留民の賛同を得て、

次の手を打ちます。山手82番地にあった元オランダ海軍病院、1866（慶応2）年にはThe Yokohama General Hospitalと改称され、各国居留民の診療を行っていましたが、病院閉鎖を考えていたオランダ領事館からこれを譲り受けることに成功します。ここに第二の公共病院となるThe Yokohama General Hospitalが誕生しました。オランダ時代から勤務していた元オランダ海軍軍医のド・メイエルとヨングが引き続き診療をおこないました。この病院は外国人のみならず、日本人の診療もおこない、また若い日本人医師の育成にもあたっていました。慶應3年の日本人向け新聞に「私（ド・メイエル）は此度各国一般の病院を建て、各国貴賤無格別療治看病仕候（以下略）」という広告を出しているのが面白く思われます。病院の名称は日本人向けには各国病院（幕末～明治初期）あるいは一般病院（明治～昭和初期）と言っていたようです。明治以降英米系の医師が診療にあたります。エルドリッジやウィラーはGeneral Hospitalのみならず、十全医院（市大病院の前身）にも勤務した医師たちです。

1923（大正12）年の関東大震災ではThe Yokohama General Hospitalは壊滅的被害を受けました。イギリス、アメリカ、ドイツなどの外国系病院が閉鎖に追い込まれるなか、この病院はかつて避病院（伝染病病院）として所有していた中村町中居台（現在の中区唐沢）の土地に仮病院を建てて、診療活動を続けました。1937（昭和12）年、アメリカ人建築家モーガンの設計による鉄筋コンクリートの新病院が完成し山手82番地に帰りました。このころから日本人医師も診療に関わり始めています。なおこの地は現在は中区山手82番地で大部分が横浜雙葉学園の敷地となり、一部分がザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニックとなっています。

第三期（1943～1946） 横浜一般病院の時代

1941（昭和16）年の太平洋戦争勃発により、The Yokohama General Hospitalは敵性財産に指定されます。帝国政府は病院委員会を同盟国・中立国の外国人と日本人に編成替えして病院の接收をおこない、改めて委員会と同じメンバーからなる財団法人に無償譲渡し、1943（昭和18）年に名称も横浜一般病院と改称させました。組織替えが済んでまもなく、山手地区が外国人立入禁止となり、病院は帝国海軍が借り上げ、横須賀海軍病院横浜分院として使用されることとなりました。横浜一般病院は海軍と横浜市の斡旋により、中区相生町にあった関東病院を買収し、1944（昭和19）年山手から移転することを余儀なくされました。同年7月1日相生町で再出発した横浜一般病院は、翌年5月29日の横浜大空襲も職員一丸となった消火活動で焼失をまぬがれました。このころの院長として、十全病院にも勤務した蓼沼憲二先生、平林俊一先生の名前が残されています。

第四期（1946～現在）

国際親善病院・国際親善総合病院の時代

日本の敗戦により、帝国海軍に貸借させていた山手の病院は再び外国人の経営に復帰します。一方財団法人横浜一般病院は1946（昭和21）年に財団法人国際親善病院に組織替えしました。この名称は病院の歴史に鑑みて、今後諸外国との良好な関係を樹立していくという信念に基づいた命名と考えます。また戦前の一般病院のとなり、山手72番地に財団法人国際親善協会（理事長 公爵一条實孝）の会館があり、ここの理事で病院の理事を兼任する方がいて、この協会の影響があったことも推測されます。内科（小児科を含む）、外科、産婦人科、理学療法科の4科、病床数59床での再出発でした。1952（昭和27）年にはさらに法人の組織替えがあり「社会福祉法人国際親善病院」に、1967（昭和42）年には総合病院となり病院名称が「国際親善総合病院」となりました。その後患者数の増加、病院諸機能の発展にともない、相生町の敷地は手狭になり、横浜市の西部地区に広大な

土地を購入することになりました。1990（平成2）年に現在の地、泉区西が岡に移転し、17診療科、病床数300の地域中核病院として診療を行うことになりました。当院の皮膚科はこの時から始まりました。また同年法人名が現在の社会福祉法人親善福祉協会と変更になり今に至っています。

一方戦後山手82番地に復帰したGeneral Hospitalは外国人理事会のもと1950（昭和25）年に山手病院（ブラフホスピタル）と改称し、さらに1986（昭和61）年には規模を縮小してブラフクリニックになりました。この組織（特例財団法人ブラフホスピタル）と当院とは長いこと疎遠でありましたが、150周年を機に両法人の理事長が面談し、今後交流をしていくこととなりました。リム・カーヒン理事長、メリー・コーベット理事には150周年記念式典・祝賀会に参加して戴きました。また最近では外国人墓地に眠る、幕末から明治初期のThe Yokohama General Hospitalの外国人医師たち〈ド・メイエル（写真②）、エルドリッジ、ウイラー〉のお墓参りを共同で行いました。



写真②外国人墓地にあるド・メイエルの墓
1833年アムステルダムに生まれ、1869年横浜に眠ると書かれています（著者撮影 2012年11月15日）